

「春」 (V e r n a l) 、緊張と解放、ヴェリーナの流した涙

飯島 昭典

はじめに

一人の女性が涙を流すとき、そこにはどんな思いが込められているのだろうか。「男泣き」という言葉はあるが、「女泣き」という言葉は存在しない。そうした事からも、涙と女性とは合わせて語られることも多く、男の涙より多くの人々に受け入れられる事柄と言えるであろう。

ヘンリー・ジェイムズ(Henry James, 1843-1916)の『ボストンの人々』(*The Bostonians*, 1886)¹は、ランサム(Ransom)とヴェリーナ(Verena)、そしてオリーブ(Olive)の三者が中心となって物語が展開する一種の社会小説、あるいはこうした言い方が許されるなら、社会恋愛小説である。ヴェリーナをめぐる、オリーブとランサムは互いに争う。結果的にヴェリーナはランサムの押しの強さに屈服し、彼の保護下にはいる、という結末を迎えるのである。ある批評家は結末について、次のような発言をしている。

．．． Only the opening and the close of the book are really effective, and they are almost as effective as it is possible for such a study as this in novel situation and novel character to be.

．．． 本の書き始めと結末だけが本当に効果的であり、小説の状況と小説の登場人物がそうである、とこのように研究することは、書き出しと結末の効果言っても良いのである。

この匿名の批評家は、結末について解釈の重要性を述べているのである。また、ジェイムズ・ガーガーノ (James Gargano) は「ジェイムズの小説におけ

る放棄の結末は、与えるよりも否定するものである」(“ the ending of the Jamesian novel of renunciation denies more than it grants ”) (135) と述べており、やはり結末に関心を示している。

筆者である私自身も最終場面のランサムがヴェリーナを連れ去るときの、「彼女は嬉しかったが、彼がすぐに気付いたのは、フードの下で彼女が泣いていた事だった」(“ But though she was glad, he presently discovered that, beneath her hood, she was in tears ”) (350) という一文に強く興味をひかれる。「これが彼女の流さねばならぬ最後の涙ではない」(“ these were not the last she was destined to shed ”) (350) かもしれない、と説明があるが一体この最終センテンスの涙の意味は何なのであろうか。

ジェイムズはしばしば「ヒロインの特別な感受性」(“ special sensibility of the heroine ”) (Gargano 121) を提示するが、この場面のヒロインヴェリーナの涙は、まさに「特別な感受性」の表れに他ならない。女性の解放運動に身を投じてきたヴェリーナにとってランサムとの結婚は、おそらくその運動の参加への中止を意味するものであろう。そして期待されるべく名声の獲得も結婚によって、消えてしまうことが予想されるのである。

しかし逆にヴェリーナはランサムの愛を獲得することになったとも言える場面である。何かを手に入れる時は、何かを失わなければならない、という通説があるぐらい人生の局面では、得るもの、失うもの、という考えが交錯する。ヴェリーナはまさに人生の新局面を迎えたところで、小説は終わりを告げるのである。ランサムとヴェリーナの二人の物語はこれから続くであろうが、小説は幕を閉じるのである。二人の生活が幸福になるのか、あるいはランサムがヴェリーナの幸せを奪った形になるのか、はわからない。

本稿で証明しようとするのは、ヴェリーナが最後に流した涙は、悲しみの涙

なのか、あるいはそれとは逆の意味を持つものなのか、を明らかにすることである。彼女の涙にはどんな意味が隠されているのであろうか。この目的を果たすためにまず、ヴェリーナに対する一つの力学である、オリーブについて考察する。次にもう一つの力学であるランサムという人間の性質について考察し、上記の目的を果たすものとする。

1. オリーブの不毛性

ヒロインヴェリーナを考える上で、重要と思われる人物の一人が、オリーブである。オリーブは高い教養と趣味を持つオールドミスであり、ボストンの進歩的知識人の典型であると言えるであろう。ヴェリーナとともに女性解放運動に参加しているが、彼女にはどこか偏執狂的な印象がある事は、否定できない。

「彼女にとって世の中で論争ほど甘美なものはない」(“ Of all things in the world contention was most sweet to her ”) (13)と説明があるように彼女は争いを好む。争いを好むと言っても、彼女は決して真の意味で強い性格の持ち主ではない。自身の弱さの裏返しとして強さという仮面を被っているとも考え得る性格なのである。弱い人間が虚勢をはり、強さを装うという事は、我々もしばしば目にする事である。その証拠に「彼女の性格は、あらしの海に浮かぶ小舟のようなものである」(“ her nature was like a skiff in a stormy sea ”) (10)、そして「この青白い薄い緑色の目をした女の、とげとげしい容貌とうわずった物腰は目に見えて病的であった」(“ this pale girl, with her light-green eyes, her pointed features and nervous manner, was visibly morbid ”) (10)のである。こうした事からもオリーブは決して自信に満ちた落ち着いた性格の持ち主とは言えない事がわかるのである。²ランサムとのやり取りで強さを見せはするが、それは自身の不安と恐

れの反動とも考えられる強さなのである。³

彼女は確かに女性を解放するという大義名分の名のもとに運動を行っているが、ここにも隠れた意味が隠されているのではないだろうか。彼女は確かに「人々の救済というロマンスに永年耽っており、貧困にある少女と親しくなるという切なる望みがあった」(“ she had long been preoccupied with the romance of people. She had an immense desire to know intimately some very poor girl ”)(29)。しかし、彼女の行った善意は、「努力が何もたらさず、」(“ the attempt had come to nothing ”)(29)、「貧しい人たちが自分たちをそう考えている以上に、そうした人たちを悲惨であると考えてしまう」(“ She took them more tragically than they took themselves ”)(29)という一方通行のものなのである。救われるべく人たちのためというよりは、オリーブ自身の満足のためという自己満足の姿を見出すことができる。これはまさに、リチャード・ポワリエ(Richard Poirier)が、ジェイムズ作品のキャラクターを説明する時に使う「自己中心的で自分の考えに囚われた」(“ egotistical and self-interested ”)(71)人物の説明に当てはまるのではないだろうか。オリーブは「過度に他者の感情の感情と必要性を無視する事によって」(“ by an extravagant disregard for the feelings and the needs of other people ”)(Poirier 71)、自身の満足を実現しているのである。

彼女のこうした善意の欺瞞性はヴェリーナに対しても明らかである。ヴェリーナと親しくなり始めたオリーブの気持ちを表す箇所を引用してみよう。

She liked to think that Verena, in her childhood, had known almost the extremity of poverty, and there was a kind of ferocity in the joy with which she reflected that there had

been moments when this delicate creature come near. . . to literally going without food. These things added to her value for Olive. (86-7)

彼女はヴェリーナが子供時代に貧困の極みを経験したと考えるのが好きであり、このいたいけな少女が・・・文字通り飲まず食わずの生活を続けなければならなかった、と考えるだけで一種の残忍な喜びを感じるのであった。この事はオリーブにとってヴェリーナの価値を高める事だったのである。

まさにヴェリーナはオリーブにとって、自己の欲望、善意という仮面を被った自己満足のために必要な存在なのである。オリーブは、ヴェリーナにとってプラスとなるのではなく、ヴェリーナがオリーブにとってプラスになる事を考えているのである。最終章でヴェリーナが彼女の元を去る時の発言、「私は嘲られ、ののしられ、蔑まれるのです」(“ I am going to be hissed and hooted and insulted ”) (349) は、まさにヴェリーナが彼女にとって必要であったのであり、自身の事を第一に考えるオリーブの姿を表した発言なのである。この他にも自分のためにヴェリーナを両親から引き離そうとするオリーブの姿、恋愛の邪魔立てなど、ヴェリーナを第一に考えるのではなく、自分を第一に考えるオリーブの姿は、作品中に点在している。

J・A・ワード(J. A. Ward)は、「ジェームズの主な技巧は、キャラクターをぶれない単純なものとして表現することである」(“ James’s principal technique is to represent his characters as undeviating simplifications ”) (118) と説明しているが、オリーブにこの説明は当てはまるであろうか。上に説明したようにオリーブはヴェリーナを第一に考える

のではなく、自己の満足を第一に考える女性である。

. . . ‘ Let her appear this once, just this once: not to ruin, not to shame! Haven’t you any pity: do you want me to be hooted? It’s only for an hour. Haven’t you any soul? ’ (344)

・・・「今回だけ、彼女を立ててください。今回だけ。私を破滅させないでください。恥をかかせないで。私を可哀そうと思わないの。嘲られてもいいと思っているの。ほんの一時間です。優しい心はお持ちでしょう」

彼女の自分中心の考えは、必然的に内側への力学となっているのである。ヴェリーナが彼女のを去れば、自分は辱めを受ける。それゆえ、彼女が絶対必要である。社会運動を成功させる事により、「自分のボストン社会での地位」(“ her place in the Boston hierarchy ”) (28)を保ち、そして「社会の指導者」(“ leader of society ”) (28)であり続ける事が出来るのである。あくまでも彼女の力のベクトルは内側に向かっていくものなのである。

実際に彼女の目指す社会運動の方法を見てみよう。「二人だけ、自分たちだけで大きな結果を生み出す」(“ the two, between them, might achieve the great result ”) (65)事が出来ると考えているオリーブである。これは間違いも甚だしい。社会改革は二人だけによるものではなく、社会の構成要素の関連において成功も見るとのだからである。そこのは当然の事ながら、男性の存在も重要である、⁴と言わなければならない。オリーブの男性観を如実に表している次の箇所を引用してみよう。

. . . No man that I have ever seen cares a straw in his heart for what we are trying to accomplish. They hate it; they scorn it; they will try to stamp it out whenever they can. Oh, yes, I know there are men who pretend to care for it; but they are not really men, and I wouldn't be sure even them! . . . (106)

．．．私が逢った男で、私たちが成し遂げようとしている事に少しでも興味を示してくれた人はいませんでした。男はそれを憎み、軽蔑し、出来る時にはいつでも踏みにじってしまおうと思っているのです。ええ、それは興味を持っているふりをする男はいましたが、彼らは実際、男ではないんです。そういう人たちでさえも私は、認めたくありません．．．

彼女は、男性の存在を認めず、運動を認める男は男ではない、とさえ言っている。運動に反対するのが男としての存在であり、男は反対しなければ、男ではないと言い放つのである。オリーブのこの態度は、運動への反対そのものへの反発の他にも、男性自体への反発が見られるのである。この事は運動を共にしながらも、「私たちに好意を示してくれる男の人もいますわ。示しすぎるとさえ思われる方だっていますわ」(“ Some of them care so much—are supposed to care too much—for us ”) (104) と述べるヴェリーナとは明らかな対照を示すものである。

オリーブはヴェリーナに対して女性が女性に恋をするという、恋愛感情があるのは明らかであるが、オリーブのヴェリーナの支配は、ヴェリーナにとって解放をもたらすものではない。ランサムとヴェリーナの恋愛が進展する過程で、オリーブは声をあげてヴェリーナにすがりつく。「どうか私を見捨てないで、

見捨てられたら私は苦しみで死んでしまいます」(“ don't desert me, or you'll kill me in trouble ”) (201)と嘆願する彼女であるが、ヴェリーナは「あなたこそ、私を助けなければなりません」(“ You must help me ”) (201)と勇気づける。この場面では当初のオリーブの心の奥底にあったヴェリーナを苦しみから救い出す、という意識下の考えは逆転し、ヴェリーナがオリーブを救うという構図になっている。オリーブはヴェリーナのランサムへの恋心を否定する、という感情の否定を行う人物である。オリーブはヴェリーナを自分自身の感情の救済者として考えており、当初のヴェリーナを救うという考えは、正反対の救われるという考えにかわり、立場も逆転したのである。ヴェリーナを解放するどころか、彼女を縛り、自分の元に置き続けようとする、足かせの働きになっているのである。

ワードの説明する通り、オリーブの性格は自分自身のためという内側への力学という点で変化しない。しかし、その不変性はヴェリーナにとっては、足かせになっていくという変化をもたらすのである。オリーブはヴェリーナに感情の解放をもたらすのではなく、閉塞感という不毛性、感情の重荷となっているのである。

オリーブは善意の欺瞞性、そしてヴェリーナにとっての負担として、その両方において不毛性を表す存在である。ヴェリーナはオリーブにとって心の解放をもたらすことはない。

2. ランサムという力学

ヴェリーナを語る上で、ランサムをはずすわけにはいかない。ランサムはヴェリーナの心を捉え、最終的にオリーブとの争いに勝利をおさめる人物なのである。彼の果た役割を十分に検討することは、極めて重要なことと思われるの

である。第1章でのランサムの登場の仕方は、やや風変りの印象を与える。客としてやって来たにもかかわらず、待たされていた彼が最初に行ったのは、一冊の書物に読みふける、というものである。しかもそれは、「腰を下ろすことも忘れるほどに興味を持って」(“ had not even needed to sit down to become interested ”) (5) 熱中するものだったのである。⁵

「その青年は、青年が貧しく見えるであろう限りに貧しく見えた」(“ the young man looked poor—as poor as a young man could look ”) (6) にもかかわらず、「素晴らしい頭と素晴らしい目の色」(“ such a fine head and such magnificent eyes ”) (6) をたたえた青年である。彼は確かに南部出身の「狭い視野の」(“ provincial ”) (6) 青年かもしれないが、頭と目の色の素晴らしさから推測できるように、何か将来を感じさせるような人物、あるいは向上していく人物との印象を持つのである。最初に読書に耽るというこの行為も、向上心という強い印象を与えるものなのである。単なる田舎者の青年と考える事もできるが、「炎を内に秘めたその目によって、彼が偉大なアメリカの政治家になるかもしれない事を示しうる」(“ the eyes especially, with their smouldering fire, might have indicated that he was to be a great American statesman ”) (6) 風貌なのである。

実際、彼は変化を経験している。初期のランサムは「多くのものが見知らぬこと」(“ Many things were strange ”) (7) という経験のなさが、支配的である。オリーブの家の様子を見ただけで、「部屋全体の様子がまさにボストン的であると彼は思った」(“ The general character of the place struck him as Bostonian ”) (14) ほど、自分の経験のなさと違和感を感じずにはいられない人物として描かれているのである。しかし、彼は行動に移すのである。この行動の背景にあるのは、彼の知識欲である。彼はアスター図

書館に出入りするようになり、次のような行動をとる。

. . . in his spare hours and on chance holidays, he did an immense deal of suggestive reading. He took copious notes and memoranda, and these things sometimes shaped themselves in a way that might possibly commend them to the editors of periodicals. (148)

・・・彼は余った時間や暇なときには、読書三昧に耽っていた。彼は大量の控えと覚書をつけて、これらのものは、定期刊行物の編集者に気に入るかもしれないような形に出来上がったものもあった。

彼は向上心から図書館に行き、論文として出版社に自分の書いたものを送る、という実際的な行動に移すのである。結果は「16世紀の雑誌なら喜んで印刷するような」(“some magazine of sixteenth century would have been very happy to print”)(148)論文であり、「彼の指摘する事は300年ぐらい時代から遅れたものであった」(“his doctrines were about three hundred years behind the age”)(148)にすぎないが、彼は南部出身という精神的負い目に屈せず、ニューヨークにて行動を起こしたのである。この出版社への投稿という行動においても、彼の風貌と同じように、地の文では将来性を感じさせる描き方をしているのである。「彼は何世紀も早く生まれすぎたのであり、古すぎたのではない、あまりにも早かったのだ」(“He had come centuries too soon; he was not too old, but too new”)(148)との説明は、ランサムの時代に左右されない生き方、ランサムの導く力を感じさせるのに十分な描き方である。彼は時代の早すぎる先駆者なのである。

彼はのちに、自分の論文が雑誌に掲載されるという日の目を見るが、こうした意味でも、彼は今は判らないが、将来を感じさせるには十分な青年である、といえないだろうか。彼には自分の力で切り開いていくような導く力、将来を切り開く力が備わっているのである。彼は成長し変わっていく、という意味でガーガーノのいう「ジェイムズはキャラクターの微妙で発展していく見方を提示している」(“ James presents a subtle and developing view of character”)(129) ことを証明できるような登場人物といえるのではないだろうか。彼は成長という変化を具現化している人物なのである。ミシシッピからやってきた青年は、自分の力で成長、変化していく人物である。

ランサムのこうした変化していく力、成長していく力は、必然的に恋をするヴェリーナにとっても変化を与えるものとなる。ヴェリーナは「先天的にも後天的にも持っている特別な率直さ」(“ herpeculiar frankness, natural and acquired ”)(296)によって、はじめ オリーブの保護下に置かれる事になる。ヴェリーナは確かにオリーブと行動を共にする事により、親近感と友情を感じている事は、明らかであった。しかし、やがてこのオリーブとの関係は、ヴェリーナにとって障害となっていくものなのである。オリーブに対して憐憫という感情が支配的になり、守られるものから守るものとしての役割へと、ヴェリーナは変化していくのである。「彼女は自分をとらえて離さないオリーブのあまりにも恐ろしい力を感じていた」(“ She felt Olive’s grasp too clinching, too terrible ”)(301)のであり、そこにはヴェリーナにすぎないオリーブの姿を見出すことができる。今や保護する立場になったヴェリーナの気持ちを表している描写を引用してみよう。

An immense pity for Olive sat in her heart, and she asked herself how far it was necessary to go in the path of

self-sacrifice. Nothing was wanting to make the wrong she should do her complete; she had deceived her up to the very last; . . . (300)

オリーブに対して大きな憐みを感じており、それゆえ彼女はどこまで自分を犠牲にしなければならないのか、と自分に問わずにはいられなかった。成し遂げるべき悪い事する上で、足りない事は何もなかった。つまり、彼女はオリーブを極みまで欺いてしまった、という事だった・・・

ヴェリーナにとってオリーブとの関係は、今や犠牲となったのである。その犠牲は、オリーブに対しての憐みからランサムとの恋愛を自由に行えない、という犠牲のみならず、上で示したようにオリーブを騙すだけだましたという嘘の罪悪感としての犠牲でもあるのである。憐みというオリーブ由来の犠牲、恋愛の不自由さという外側への犠牲と、嘘をつくという罪悪感由来の内側からの犠牲という二重の犠牲にヴェリーナは苦しんでいるのである。そのいずれの場合にも、オリーブの存在が関わっているのである。

オリーブの存在が足かせになっているが、ヴェリーナが求めるのは間違いなくランサムとの恋である。「単に真理が在りかを変えたのだ。その輝かしい真理の姿がバジル・ランサムの表情豊かな目から、彼女に訴え始めた」(“ It was simply that the truth had changed sides; that radiant image began to look at her from Basil Ransom’s expressive eyes ”) (299) とあるように、ランサムとの恋はヴェリーナにとって真理なのである。「彼女は愛していた」(“ She loved ”) (299) という感情は、ヴェリーナにとって幸せな感情である。ランサム自身の愛もヴェリーナは感じているのであり、相思相愛の望まれる恋の形である、と言えるであろう。彼との愛が「自分にとっ

ての幸福の条件」(“ the condition of happiness for her ”)(300)とヴェリーナが感じたのも当然の事と思われるのである。

オリーブはヴェリーナの感情を否定する働きを作品後半で担っている。なぜなら恋をするヴェリーナにランサムから引き離そう、という力を加えるからである。これはヴェリーナにとって望ましい事ではない事は、明らかであろう。逆にランサムは、ヴェリーナに対して愛という感情を与え、そしてヴェリーナ自身もそれを望んでいるのである。ランサムは、ヴェリーナの望む感情を肯定する存在なのである。

もちろん、ランサムとの恋は苦しみを伴うものである。ヴェリーナにとってランサムとの恋愛の成就是、精神的な緊張を経験しなければならない事であろう。⁶運動を共にしたオリーブとの別れ、約束された地位、名声、あるいはそれを望む両親との精神的な別れ、場合によっては物理的な別れも経験しなければならない事だからである。

オリーブとの行動は「いわば温室育ちの忠誠、単なる見よう見まね」(“ a kind of hothouse loyalty, the mere contagion of example ”)(319)であり、オリーブの友情という名の愛情を一方的に受けるだけのものである。しかし、ランサムという存在はヴェリーナにとって「彼が彼女に自分の事を知る事を望み、そして今や彼女も彼を十分によく理解した」(“ he wanted her to know him, and now she knew him pretty thoroughly ”)(301)という単一方向ではない、心の交流という双方向的な状態なのである。

ヴェリーナにとってランサムの持つ成長する力、将来を切り開く力、と愛という心の交流の感情は、たとえ苦しみの伴うものであっても、オリーブの不毛性とは反対の将来を感じさせるものなのではないだろうか。ランサムは自らが成長し、そして導く力となり、心の交流を実現させる力なのである。

結論

It is to be feared that with the union, so far brilliant, into which she was about to enter, these were not the last she was destined to shed. (350)

これから彼女が入ろうとする輝かしさとは程遠い二人の生活について、今流している涙が、彼女が流すことになる最後の涙でないかもしれない。

これは『ボストンの人々』のまさに最終センテンスである。アーヴィング・ハウ (Irving Howe) は、この箇所を論じながら、「ランサムとヴェリーナはついに結婚し、以降不幸な生活を送るであろう」 (“ Ransom and Verena, married at last, would live unhappily ever after ”) (169) と予想をたて自身の論文を締めくくっている。

影響を受けやすいヴェリーナは「いつも誰かの支配下にあり」 (“ always under somebody's control ”) (61) オリーブの支配下から、今ランサムの支配下へと自分の場所を移したのである。

確かにランサムとの結婚は、オリーブ、両親の期待、地位、名声とは反対の家庭中心の幸せを約束させるものである。そうした意味で、ヴェリーナが当初目指した女性を解放するという運動とは、相容れない事かもしれない。ハウはこうした事から、作品をネガティブなものとして、一人の女性を縛るものとしてランサムの結婚、そして続く不幸と捉えたことが予想される。

しかし、ヴェリーナは失っただけで、得たものは何もないのだろうか。私はヴェリーナが手に入れる事が出来たものは、何物にも代えがたい代物ではないか、と考えるのである。彼女が得たもの、それは地位や名声、あるいは金、そ

の他いかなるものによっても変える事が出来ないもの、ヴェリーナの愛の成就である。

ヴェリーナは何も無理やりランサムとの結婚に及ぶのではない。ランサムの強い導く力があつたにせよ、彼女自身もランサムとの結婚を望んだのである。

「私はどうする事も出来ないのです。今まで通りあなたを愛しています。どうか行かせてください。どうか行かせてください」(“ I can't help it, I love you just the same; let me go, let me go! ”) (348) と母親に打ち明けるヴェリーナである。ランサムへの愛を抑えきれずに、ヴェリーナが自らの意思を表している場面である。ヴェリーナが自分で選んだのは、名声や評判ではない。愛という感情である。

自身の主観で選んだものの幸福が、外面的な要素の幸福よりも、大きな幸せである事は、紛れもない事実である。本稿の第一部で示したように、オリーブは不毛性を表す人物である。オリーブとの生活の継続によって、外面的な幸せの要素は手に入れるであろう。地位、名声、金などがそうである。しかし、それはヴェリーナのランサムへの愛という感情を裏切るものなのである。いわば、自分の気持ちに素直になれずに、嘘をつき続ける状態での生活となる。

本稿の目的である最後にヴェリーナが流した涙の意味を、明らかにする時が来たようである。ヴェリーナが最後に流したのは、決して悲しみの涙ではない。自分自身の中で争っていた、オリーブの与える幸せとランサムと与える幸せの争いに決着がついた瞬間なのである。「ああ、これで私は幸せになる」(“ Ah, now I am glad! ”) (349) と会場から表通りに出た時に彼女が発した言葉は、緊張からの解放を表す言葉である。涙には、オリーブの事、両親、名声、運動の事への今は完全に捨てきれない思いの意味もあるであろう。しかし、ランサムという導く力、成長する力によって与えられた愛と自分で望んだその愛の成就によって、それらのわだかまりは、やがて消えてゆくものなのである。

なぜなら、ヴェリーナは自分でその道を選び、それを望んだからである。会場から表通りへの移動は、単に物理的な移動のみならず、彼女の精神的な感情の移動、オリーブの与えるものからランサムの与えるものへの移動を表しているのである。そこは、会場という閉ざされた場所ではなく、他へのつながる表通りなのである。ヴェリーナが最後に流した涙は、感情の解放を表す涙であり、幸せの涙である。ヴェリーナの名前が表す「春」(“Vernal”) (玉崎 433) のように、彼女には新しい生活と幸福感、オリーブの不毛性から離れた、生命を感じさせる生活が待っているのである。⁷

註

1. 以下、ヘンリー・ジェイムズ『ボストンの人々』からの引用は、Penguin Books, *The Bostonians*, ed. Richard Lansdomwn の版による。
2. 玉崎 紀子は、自身の論文でオリーブの名前に注目し、オリーブの実としての “ green eyes ” 、 “ she was not old—she was sharply young ” などの描写から、彼女の未熟さ、生硬さの表れ、ルナ夫人の sexuality とは反対の、sexual coldness の表れとしてオリーブを論じている。少なくともオリーブの名前を和解のしるしとしてのオリーブの枝の象徴とは捉えにくい。争いを好む性格は、むしろこの逆ではないだろうか。
3. ユングは人間の心にある相反する感情に注目したが、オリーブの場合にも、弱い自分の防護柵として強い自分を演じている、というのは十分に考えられることである。無意識であるが、彼女は自分を守ろうとして、争いを好み、強さを誇示していると考えられるのである。彼女の不安定さ、神経質さ、ヴェリーナに対する強い依存を考えれば、弱さからの反動の行為としての彼女の強い態度と考えると、それ程見当違いではない。我々の日常でも、弱い人間が見栄や空威張りをする光景は、しばしば認められる。
4. フェミニズムの発展過程において、男性の存在を無視した、1960年代以降の第2派フェミニズムの様々な形を見ても明らかである。男性の存在の無視の行き着くところというのは、体格差や性別差を無視したラ

ディカルなフェミニズムに通じるのである。ポストモダン・フェミニズムなどの男性性、女性性の無視の運動のもたらすものは、実りが少ない。

5. この他にも本に夢中になるランサムを描いている箇所があるが、ジェームズは意識的にランサムの向学心を強調したと思われる。またこの場面を、彼の元々持っている身分による、卑屈にならない好ましい態度と考えることも可能ではないか。図々しさとは考えずに、知らぬ場所でも臆する事のない、身分由来の堂々たる態度とも考えられる。いわゆる、「腐っても鯛」といった態度。
6. この緊張状態の恋愛をジェームズ・ボールドウィンは、「幸せならいいという幼稚なアメリカ的思考を言っているのではなく、激しくそして普遍的な探求と勇気と成長の意味における愛」と定義している。“Down at the Cross”, *Collected Essays*, p.341.
7. ヴェリーナの表す「春」と涙の表す「水」のイメージの合体により、春の雨、恵みの雨と考える事も可能である。二人の生活を芽吹きと考えるなら、ヴェリーナの流す涙は、それに必要な雨のイメージである。

引用·参考文献

- Anonymous. “ *The Bostonians* ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 58-61.
- Anonymous. “ *The Bostonians: A Comprehensive Condemnation* ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 61-62.
- Bruce, David. *Henry James in Context*. Ed. David McWhirter. Cambridge: Cambridge University Press, 2010.
- Collister, Peter. *Writing the Self: Henry James and America*. London: Pickering and Chatto, 2007.
- Edel, Leon. “ *The Portrait of a Lady* ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 145-154.
- Gargano, James. “ *Washington Square: A Study in the Growth of an Inner Self* ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 129-136.
- Hadley, Tessa. *Henry James and the Imagination of Pleasure*. Cambridge: Cambridge University Press, 2009.
- Howe, Irving. “ Introduction to *The Bostonians* ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987.

154-169.

James, Henry. *The Bostonians*. Ed. Richard Lansdown. New York: Penguin Books, 2000.

Poirier, Richard. “ Roderick Hudson ” A Study in the Growth of an Inner Self ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 71-96.

Titner, Adeline. “ Miriam as the English Rachel: Gerome’s Portrait of the Tragic Muse ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 185-198.

Tuttleton, James. “ Rereading *The American*: A Century Since ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 96-116.

Ward, J. A.. “ James’s *The European* and the Structure of Comedy ” *Critical Essays on Henry James: The Early Novels*. Ed. James. W. Cargano. Boston: G. K. Hall, 1987. 116-130.

Zacharias, Greg. *A Companion to Henry James*. Ed. Greg Zacharias. Malden: Wiley Blackwell, 2008.

玉崎 紀子 「ヘンリ・ジェイムズの *The Bostonians* について」、愛知、中京大学紀要、1980年、429-449頁。

松下 千雅子 『クイア物語：近代アメリカ小説のクローゼット分析』、京都、人文書院、2009年。

藤田 栄一 『ヘンリー・ジェイムズの芸術』、京都、晃洋書房、2006年。

萩野 昌利 『小説空間を読む： ジョージ・エリオットとヘンリー・ジェイムズ』、東京、英宝社、2009年。